
 新 刊 紹 介

Akatsuka, I. (ed.): **Introduction to applied phycology.** vi+683 pp. 1990. SPB Academic Publishing bv, The Hague. Price: Dfl. 240 (邦貨約2万円)

我が国でも藻類学のこれまでの研究をまとめた綜説論文集の英文著作が見られるが、その内容は主として国内に限られたものである。本書は日本人で初めて国際的視野に立って編集した応用藻類学の本で昨年オランダから出版された。掲載する論文数は30編と多く、それぞれの論文の長さは5頁から55頁と異なるが、全体として683頁からなる大著である。執筆者は共著も含めて51名、11名の日本人の方々のお名前も見られ、いずれもその方面で国際的に活躍している研究者ばかりである。本書の特徴の一つは、現在話題になっているものから将来その可能性が十分あるものを含めてこれまで余り紹介されていない色々な分野の総説を収めていることで、藻類が我々の周辺で広い範囲に関連していることを改めて認識させられる。それぞれの論文は藻類の応用の分野について極めて興味深い最先端の知識を提供し、各トピックの概略を知ることが出来て題名通り入門書としての役割も果たすが、いずれも豊富に列挙している関係文献により最近の詳細な背景を知ることが出来、むしろ専門書として研究者・学生のいずれにも勧めることが出来る。本書は次ぎの様に3つの部分に大別され、トピックスごとにこれまでの研究の経過、問題点更に将来展望などを述べている。

大略を示すと、

パート1は224頁、11編の論文からなり、細菌学、菌類学、薬学、理化学などほかの基礎的な学問分野に

関連するものを含み、海藻の抗菌性；薬理作用；毒成分とその取り込み機構；解毒作用；特殊含有成分（赤血球凝集素）；金属イオン除去能力；海藻粘質物の物理化学的性質；植物プランクトンの餌料としての価値及びノリの病害と食品の価値（味と香り）について述べている。

パート2では157頁にわたって海藻と生息環境との関わりについての5編の論文からなる。即ち植物プランクトンと富栄養（湖沼では現在量の変化、海洋では赤潮）；動物の食圧；着生生物との相互関係及び海での汚染源（船底及び構築物の汚れ）について総説している。

パート3では幅広い利用や応用面、技術関係、バイオテクノロジーなどについての論文14編、277頁からなる。即ち海藻粘質物の食品、医科・歯科への利用；製紙・製塩技術；微細藻類の大量栽培技法；排水処理やビタミン定量測定法での藻類の役割；ノリ・オゴノリ・ツノマタの養殖についての海外事情；メタンガス生産の将来性；農耕・園芸への微量成分の効用；組織培養（細胞、原形質体、組織）などによる遺伝子工学と予想出来る今後の成果など広く紹介している。

以上掲載論文の数々は藻類の各方面への利用・応用についての知識を増し、理解を深め、より一層の興味を覚えさせるものであり是非一読をお勧めする。尚、本書は国際的にも評価が高く、逸早く *Journal of Applied Phycology* 3巻（1991年）が好意ある書評を掲載していることを付け加えておきます。

（226 横浜市緑区東本郷6-27-2-306 正置富太郎）